京都大原福音特別集会

信仰とは何か
――創世記第12、15、22章、他――

１９６２年７月15日
小池辰雄

信仰の父アブラハム　神を然りとする　自分の信仰に絶信　キリストの言葉に投身　信即行
信は内的な行　信行一如　信仰のみ　信は即ち現　在らしめて在るもの　逆説の道　十字架即
復活聖霊　信は人編に言　事理不二　御霊は一つ　聖霊の驚くべき現象　キリストの本願の劫
力　煩悩即菩提　キリストの書　パウロの回心　愛信一如　懼るな、我なり

【創世記12】

1時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい、2わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基（もとい）となるであろう。

【創世記15】

4この時、主の言葉が彼に臨んだ、「この者はあなたのあとつぎとなるべきではありません。あなたの身から出る者があとつぎとなるべきです」。5そして主は彼を外に連れ出して言われた、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみなさい」。また彼に言われた、「あなたの子孫はあのようになるでしょう」。6アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。

【創世記22】

1これらの事の後、神はアブラハムを試みて彼に言われた、「アブラハムよ」。彼は言った、「ここにおります」。2神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭（はんさい）としてささげなさい」。3アブラハムは朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者と、その子イサクを連れ、また燔祭のたきぎを割り、立って神が示された所に出かけた。

●信仰の父アブラハム

宗教のことというと、一番たくさん使われる言葉は「信仰」という言葉です。信仰という言葉ほどたくさん使われて、またこれが誤られているというものも、あるいはないかも

知れません。一体、この「信じ仰ぐ」という「信仰」というのはどういう言葉なのか、私はよく知らない。

聖書の世界では、イスラエルの民が神さまに呼ばれて、その歴史を通してその信仰というものが鍛えられてきたわけです。イスラエルの民の信仰の歴史の大先輩はアブラハムです。「アーブ　ラハーム」というのは、「多くの者の父」というヘブライ語ですが。ヘブライ語の名前はみな意味がある。ヘブライ語の字引を引っ張ると、一番先に出てくる字がこの「アーブ」「父」という字なんです。「父」という字が字引の一番先に出てくるとは非常におもしろいことです。アブラハムは信仰の父である。そのことは新約聖書の開巻第一の言葉をみてもわかる。

「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」

とある。イエス・キリストは「アブラハムの子」といったって、アブラハムの子はイサクですよ。アブラハム、イサク、ヤコブという。ところが、「アブラハムの子」と書いてある。なぜ「アブラハムの子」なんて書くかというと、これは信仰の父アブラハムの斎（すえ）という意味です。信仰の父アブラハムの裔、また王者としてのダビデの裔。これが「アブラハムの子、ダビデの子」という見出しの意味合いであります。

創世記12章に、

1時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい、

この「主」と訳されているのは「ヤーヴェー」という字です。昔は「エホバ」と書いた。神さまが「あなた」と言うのは、なにか私は今の聖書の訳がときどきくすぐったくてしょうがない。やはり、昔の「汝」「我」と言う方がいい。私は人間が古いせいかしりませんが、どうも新しい聖書は読みにくくてしょうがないので、困るんです。日本語というのは代名詞が多くて、英語なら「I」で済むところを、「我」だの「私」だの「わたくし」だの「吾人」だのといろいろな言い方があるので困るわけですが。

2わたしはあなたを大なる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基（もとい）となるであろう。

祝福の基となるというようなことが約束されている。アブラハムに対する神さまの約束です。そして、

「アブラハムは出で行くところを知らずして、ウルから出て行った」

と書いてある。

今、讃美歌で「主よ、御手もて引かせたまえ」とあったが、正にその通りで、アブラハムはヤーヴェーに引かれて、ウルからずっと北の方に回ってパレスチナの方へ下りて行ったわけです。

このアブラハムという人が信仰の父であるという証拠はどこにあるかというと、著しい

ところの一、二箇所をみますと、創世記15章4節のところに、

【創世記15】

4この時、主の言葉が彼に臨んだ、「この者はあなたのあとつぎとなるべきではありません。あなたの身から出る者があとつぎとなるべきです」。5そして主は彼を外に連れ出して言われた、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみなさい」。また彼に言われた、「あなたの子孫はあのようになるでしょう」。6アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。

この「義と認められた」という、日本語の敬語の「られた」という訳もときどき困る。誰か大文豪で信仰の人が出てきて、ルターみたいに新しい日本語を創造してくれるといいと思うようなわけですけれども。

●神を然りとする

「アブラハムは主を信じた。主はこれを彼の義と認めた」

という。アブラハムは、もう歳が進んで、子どもができそうにない。それなのに子どもができるという。神さまの言われることは、自分の常識や判断からはどうも分からん、非常識だと言うわけです。しかし、「主を信じた」というヘブライ語の言葉は、自分の経験や判断を乗り越えて――超理性、理性を乗り越える。没理性ではない。超理性です――それで、

「神さまにアーメンと言った」

という字です、ヘブライ語では。神さまに「アーメン」とアブラハムは言いました。そうしたら、神さまは、アブラハムのその答に対して、彼を「義」「セデック」とした。義となした。

「信じた」「アーメンと言った」

そうしたら、

「義とした」

という。「アーメンと言った」というのは、日本語でいうと、「まことととした」ということ。神さまを誠（まこと）としましたらば、それを「義（よ）し」とした。超理性をもって神さまに全存在をもって答えた。

「どうも分からんけれども、仕方がない。神さまが言ったから、まぁ、一応信じておこう。聖書にこう書いてあるから、一応信じよう」

なんて、そんなものは信仰ではないですよ。ところが、どうもそういうのが多いようですね。

「まぁ、しょうがないから、一応信じておこう」

と。そういう「一応……」というような調子のことは、それは信仰の世界には何もならない。理性を乗り越える。この「誠（まこと）」という字を見てください。言が成ると書く。「神を誠とした」とは「神の言は成るとした」ということ。神さまの言は、

「**わが言は必ず成る**」

とイザヤ書にも書いてある。

「神の言を成るものと受けとる」

ことが、これが「誠とする」ということで、これが「信」「信ずる」ということです。信ずるとは、神の言を誠とすることだという。そうすると今度は、自分の言葉や自分の思いは、これは当てにならんとすることだ。だから、

「神さまに然り」

と言うことは、

「己に対して否」

と言うこと。己の理性に対して「否」と言って乗り越えてしまう。

「私もだいぶ然りなんだが、神さまの方は百％に然りだ」

なんてのではない。自分の方はマイナスで、神さまの方はプラスです。これは電気の法則でも相照応する世界です、このプラスとマイナスは。

不思議ですね。神さまとピタッと一つとなろうと思ったら、自分を否と言わなければ一つになれない。己を否と言わなくては。よく、哲学や何かでも、「自己否定」なんていうことを言うだけは言いますよね。けれども、そんな加減された否定ではない。己の理性も感情も意志も――わが知情意だな――わが知情意を乗り越えて、神を然りとする。神の言を誠とする。神の意志を誠とする。これが「信ずる」ということです。

●自分の信仰に絶信

自分の信仰というもので信ずるのではないですよ。自分の信仰というものを一つの前提として、それで、自分が

「まだ私は信仰がうすくて、私はまだ信仰が動揺しまして、私はもう少し信仰があつくなってから」

なんて思う。キリストが「ああ、信仰うすき者よ」なんて嘆かれるものだから、

「自分の信仰をもっとあつくしなければならない」

と普通、クリスチャンは思うですよね。ああいうキリストの言葉に躓かないように。

「**ああ、信仰うすき者よ**」

と言われたら、いよいよ信仰がなくなった方がいい。自分の信仰なんかに絶してください。絶信です。自分の信仰なんていうものを当てにしているから。自分の信仰を当てにしたってダメですよ、そんなものは。信ずるとは、

「己を信じない。己を当てにしない」

ということです。

「当てにするのは、神さまとキリストだけだ」

ということです。自分がどんなに木の葉のごとく揺れても大丈夫だということです。自分が何か揺れたり、グラグラすることを非常に懸念して、戦々恐々としていたって、これはダメです。

疑いと恐れは信仰には禁物です。

「ああだろうか、こうだろうか、こういう場合もありはしないだろうか、こういう条件のもとならこうでなかろうか」

と。「であろう」というのは学者的良心といいましてね、「であろうか、なかろうか」と――学問の世界はそれでいいかも知れないけれども――非常に疑う。「疑うのは学問の始めだ」なんて言う。けれども、信仰の世界は、疑うのは信仰の始めにはならない。信仰脱落だ。疑いと恐れ、これは禁物です。自分を見てたら、疑いや恐れが来ますよ。

「自分は大丈夫だろか」

と疑ってみたり、

「どうも危なっかしいな、この橋は」

なんてね。足もとが危なっかしくなる。それで恐れる。これは百年たってもダメですよ、私たちは。どんなに環境が、平和的な環境に置かれたって、ダメです。ちょっと幽霊が出てくれば、恐がったりする。そういう、運命はどうせいろいろ動揺してきますよ、外側から、運命だの境遇は。境遇は安泰なんてものはありはしない。

そういう動揺しているただ中で自分をみていたら、こんな自分を当てにしていたらしょうがないから、それはもう止しましょうと、自分にけりをつけなくてはいかん。「自分にけりをつける」と言ったって、それは自分ではできませんよ。

「私はけりがつきました」

なんて力んだって、翌日はまたおかしなことになる。けりがつかない自分にけりをつけるためには、本当に大丈夫なところに目を注がなければ、自分の魂を注がなければ、自分の存在を投げかけなければ。それでなければ、本当の自殺になってしまう。

●キリストの言葉に投身

投身する。キリストの言葉に、神さまの言葉に、身を投げかける。これを「信」という。信仰とは、己の信仰を信じない。己の信仰に絶して、この信の対象であるところの――「対象」と言うよりも――信の主体であるところのものに自分を全托する。

「なかなか、私は全托ができません」

と、こう言う。それはできませんよ、私だってなかなか全托できません。もし、私自身の全托の気合というものだけを当てにしていたら、私はまたダメになってしまう。

アブラハムは、神さまを「然り、まことに」と言って、もう望みなきときに――

「アブラハムは望みなきときになお望みたり」

と、どこかパウロの書簡に書いてある――その望みなきときになお望んだということは、神さまの言葉に捉えられたということです。自分の何か力みではなくて、この神さま言葉に取り入れられたということは、自分の理性や自分の判断や自分の意志なんていうものとは問題にならない、驚くべき神さまの判断であり意志であり神の言葉であるというところに、喜んでそれに自分を託してしまった。

本当のその世界に入りますと、今度は、その理性だとか感情だとか意志だとか、それが逆に上から生かされていく。上から生かされて、これが使われていく。決してそれを没理性にはしない。理性も感情も意志も、今度は神のものとして使われる。だから、それが本当の信だということです、結論を言えば。そうでないものは迷信ですよ。理性を没してしまったり、感情がなくなってしまったり、意志がへんてこになってしまったら、それはちょっと迷信的な信仰かもしれない。

この聖書が伝える真理は、聖書の信の世界は、福音の世界はどこまでも根源であります。根源であって、一切のものを生かしていくところの、一切のものを担っていくところの、一切のものを照破していくところの元です。源泉です。根源である。根っこでありまた源泉であるところのもの。こんな素晴らしい世界をとり残してたまるものかというわけです。

●信即行

アブラハムはその信の中に自分を置いて行ったら、その通りになった。その通りに彼は恵まれた。もう百歳くらいのアブラハムとサラからイサクが与えられた。このイサクという独子を――

「神はその独子を給うほどに」

というが――今度は神さまはどうしたかというと、創世記22章にご承知のとおり、

[1]これらの事の後、神はアブラハムを試みて彼に言われた、「アブラハムよ」。彼は言った、「ここにおります」。[2]神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」。

と。とんでもない命令です。世の中にこれくらい不合理なことがあるかという。これくらい訳の分からない神さまがいるかと。せっかく独子を与えて、「それが祝福される多くの者の源になる」というその独子を今度は「献げろ」とはどういうことか。

いつかも引用したかと思いますけれども、テニスンの詩の中に、

"no reason why, but to do and die"

「何ゆえと理由つけることなしに、ただ為して死することあるのみ」

という言葉がある。クリミヤ戦争の時の、軽騎兵の死の谷に向かっての有名な詩がある。何か上官の命令が間違っている。これを突っ込んだら、六百の兵士が全滅することがもう

目にみえて分かっている。けれども、命令だから、「何ゆえと理由づけることなしに、ただ為して死することあるのみ」と、それで悲壮な最期を遂げてしまった。

アブラハムは自分の息子を連れて、何ゆえかと問うことなしに進んで行った。そこのところを注意深く読んでください。アブラハムは何とも答えていない。彼は今度は「はい」とも言わない。

3 **アブラハムは朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者と、その子イサクを連れ、また燔祭のたきぎを割り、立って神が示された所に出かけた。**

ここなんです、問題は。信仰とはもはや言葉でもない。言葉で「はい」と答えることでもない。いや実に、言葉で「はい」と答えるということは、全身をもって答えていることなんです。だから、それは今度は、アブラハムは胸にぐんときたね。ぐっと胸にきたから、正直もう言葉も出ない。自分の心臓に刃を向けられているよう始末だ。自分の息子を殺せというんだから。涙も凍ってしまったような次第だ。涙も凍るような、そういう事態にでっくわして、もう仕方がない。これは実行に移そうと。それで彼はいきなり「ツー　ドゥー」に、行動に出た。イサクと共に「ツー　ドゥー　アンド　ダイ」だ。イサクと共に死ぬのだと。それが即ち、信が即、行である。こんなことを今、キリスト教会で言うと、これは躓きですよ。

「義人は信仰によって生くる。行為にあらず、信仰のみである」

とガラテヤ書にもそう書いてある。パウロがそう言った。それなのに行為をまた持ち出してきて、とんでもない話だというわけです。あるいは、カトリックの方が今度は喜ぶかもしれない。でも、私はカトリックでもプロテスタントでもない。私はキリストの福音の世界のつもりであります。間違っていたら、いつでも私は兜（かぶと）を脱ぎます。

それで、アブラハムは直ちに行じた。信が即、行である。信じてそれから行うなんていう、二段構えではない。信ずるとは直ちに行動することである。けれども、私の現実は正直、信仰と行為がしょっちゅうズレていますよ。しょっちゅうだか、何％だか知らないけれども。とにかく、よくズレるでしょう。そんなことを私は自分で省みたことはあまりないけれども。どうせ、省みたってしょうがないから。

信と行とがそんなにズレているダメな、省みるにも価しないようなやつが、なぜこんなことを言うか。たとえ、全世界に一人もその本質がつかめない人があっても、私は言わざるを得ない。福音はそうなんだから。キリストは何と仰ったか。

「私の言葉を聞いて行わない者は天国に入れない」

と言われた。イエス・キリストは決して神学的なものの言い方をなさらない。あるときは、「ただ信ぜよ」と仰るかと思えば、あるときは、「行え」と言われる。でたらめのようですよ、イエスは。だが、でたらめではない。信即行というものがどうして一つであるかというと、この現象面を見たらダメです。私はアブラハムのいきなりやったという、ただその行の現象を見て言っているのではない。その行の現象の奥にある世界を見て言っている。このア

ブラハムの行は、彼の全存在が本当の信であるから、ここに行ならざるを得ない。せざるを得ない。太陽の光が花に照れば、花は咲かざるを得ない。その中に光が浸透すれば、信がここに真に化体（かたい）すれば――信が化体するんです――行ぜざるを得ない行なんです。

●信は内的な行

そこで私は言います。たとえこの行がどんなに惨憺たる行で、どんなに信とズレていても、問題は、行いが外側で現象的にズレているかズレていないかではない。どんなに外側でズレていても、ズレていないということが言えるということにならなくてはいかん。分かりますか、どういうことだか。

この百合の花は、今はこのように咲いてますね。けれども、これを虫がくって、花弁がみんな落ちて、一体これが花かと思われるような花であるかもしれない。しかしながら、これは百合の花なんです。どんなに虫に食われていても、これは造り花ではない。これは生きた花です。だから、どんなにその行が、たとえ現象としてほとんど行として現れなくても、その人が真の信を持っていれば、必ずそこに行があるんです。根源的にある。何となれば、信は内的な行なんです。

「アブラハム、エホバを信ず」

「然り」と、全存在で魂の奥底から「然り」と言っている。自分の中に何か残っているのではない。「神さま、そうです」と言うときには、全存在が即ちもう内的行なんです。驚くべき行が凝集しているんだ。それがどれだけの花が咲こうが、咲くまいが、もはやそのズレは問題ではない。

ところがですよ、信じてものを言って、外側はまことに立派な行為をしていても、ちょっと見るとズレがなくても、これがバラバラな信と行がある。

「人にどう思われるから、これはしっかりやっておきましょう」

と。そんなような行は何ですか。偽善というやつです。問題は、どこまでもそれが本ものかどうかということ。たった下限の惨憺たる姿でしか現れていなくても、これは本当の行なんです。ズレのない行なんです。アブラハムの花は、ちょうど百合がちゃんと咲いているように咲いた。けれども、それがアブラハムが惨憺たる行の仕方をしましても、それでもなおこの信と行は離してはいかん。

パウロの「信仰によって救われる」と――ルターが、

「信仰によってのみ救われる」

と「のみ」を付けた――「信仰によって義とされる」という。その「のみ」が本当の「のみ」であるならば、その信は必ず行と相即している信であるはずです。それを今度は、その「のみ」をこっちばかりのいわゆる儀文にしてしまって、

「信仰のみで行為はどうでもいい」

と言って、ちょうど親鸞の場合の、

「南無阿弥陀仏と言っていれば、何をしても勝手だ」

なんていう踏み間違いをしたご連中がたくさん出たと同じことです。親鸞においては、

「南無阿弥陀仏ただ一念でよろしい」

と。しかし、そこは自然に、ざるを得ないところの行が、知らない無意識のうちに花咲くというような始末です。また、それがどんなに惨憺たる姿をしていても、問題でない。これは法然もそう言っている。親鸞に大いにそこを慰めている。親鸞もそれをもうひとつ深く受けとった。あの『歎異抄』をご覧になれば、信仰の本当の姿がみえます。

●信行一如

そういうわけで、最澄、空海、法然、親鸞、みなこの京都にゆかりのある素晴らしい先輩のあとを、この福音の世界であなた方は、最澄、空海、法然、親鸞のそれ以上の――どんなに器は小さくとも――それ以上もの凄い質の魂になってくださいよ。神さまはそのようなダイヤモンドをつくろうとしているわけだ。私はいつ死んでもいい。あなた方がそういうようになってくだされば。

「親鸞においては一人の弟子もござなくそうろう」

と。弟子なんかつくろうと思ってやっているのではないと、親鸞も言っている。

ただ本当に道を伝えて、その道をする本当の「道人」だな。本当の道の人を起こしていけば、どんなに世界がどうなりましても、これは大丈夫だ。そういうわけで、絶対にここのところを捕まえなくてはダメですよ。この信行一如の世界を。この一如相即の世界をヨーロッパの人はなかなか掴めないんです。すぐ、

「正・反・合」（テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ）

とか言いまして、ヘーゲルやカントからずっとやっている。ヘーゲルに相当たてついたのが、キルケゴールという人ですけれども。

「信行」がそういう一如であるというと、「信行一如」という意味の信仰の把握の仕方になってくると、真理は簡単なところに力がある。分裂したら力が出てこない。この

「一如」

という世界は、仏の世界で坊さんたちがみんな把んでいた世界です。我々は東洋人はこの一如の世界を把むのに実は非常に優れた魂である。分析・総合ではない。一如の世界から限りなく展開する。一如の世界から無限に展開できる。これを知らない。一如の世界から無限に展開するためには、福音でなければこの無限の展開が出てこない。いわゆる悟りの世界ではまだ足りない。

●信仰のみ

アブラハムはそのようにして神さまをハタと全存在をもって受けとっていたから、アブラハムは行に出た。ガラテヤ書では、

「信仰のみ」

と言いい、ローマ書では

「アブラハムは信仰によって義とされた」

と言う。ヤコブ書では

「アブラハムは行為（おこない）によって義された」

と書いてある。おもしろいね。私はあのヤコブ書があるために、かえっておもしろいと思った。ルターは、

「ヤコブ書は藁（わら）の書簡だ」

なんてけなした。

「また行為なんて言いだしてとんでもない」

と言う。それは、

「信仰だけだ」

と言って、今度は信仰をはきちがえて

「行為はどうでもいい」

と言うようなやつらが出てきたから、ヤコブがもう一遍そこで行為のことをそこで言っておかないと、またバランスがとれなくなってしまうからという現実の面もおそらくあったでしょうね。ヤコブは、今私が言ったような意味において、はっきりとは言っておりませんけれども、このパウロとヤコブは実は一つなんです。はっきり言ってなくたって、その現実は私は間違いなかったと思う。

即ち、彼らはこの根源の信を持っていた。

「行為なき信仰はいたずらである」

とヤコブが言った。即ち、「行為なき信仰はいたずらである」ということは、私の言葉で言えば、

「信は本当の信ならば即、行である」

ということをもうひとつヤコブを突っ込んで言いたいわけです。今度は、パウロの「信仰のみ」というのは、

「信仰自身が内的な行為である」

と、私に言わせれば、言いたいところです。これは私ではないですよ。私に在るところの御霊がかく宣言するわけです。それを間違ったら私は兜を脱ぎますよ。

けれども、現実の人間は現象的にはズレがあることは、これは正直ある。私自身もそれを認めます。けれども、現象のズレと本質が如何であるかということとは、それは問題が

違う。これをやっていなかったならば、私の信仰自身がもう死んでしまう、枯れてしまう、ダメになってしまう。私は自分の経験からそう申しあげる。学者は、

「ルターは言い過ぎた」

とか何とか言って、ヤコブを一生懸命で弁護しようとするが、それはある程度弁護しようとしているだけの話です。けれども、ある程度弁護したって、そんな弁護の仕方はダメですよ。本当にヤコブのために弁護せんとするならば、この根源から弁護してやらなければ。パウロの「信仰のみ」も、ルターの「信仰のみ」もその根源から、その「のみ」は必ず「行為と相即」しているものであるということです。

●信は即ち現

だから、信仰は、ヘブル書11章の始めの方に、「信仰はいまだ見えないものを本当にし、現れてこないものを真とする」と書いてあるでしょ。

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実（まこと）とするなり。」（ヘブル11・1）

「信仰は望むところの実体であって、見ぬ物の確証、証拠である」

という。信仰は実体であり証拠であるという。信仰は望むところの実体で、見ぬ物の確証である。なぜ、そんなことを言うか。「なぜだか分からないけれども、とにかく信じておきましょう」は信仰ではないとさっき申しあげましたように、「実体であり確証である」ということは即ち「現実である」ということです。

「信は即ち現である」

と、私はまた今度は言う。信は即ち現である。現（うつつ）の世界である。

「神さまはあるだろうか、ないだろうか」

なんて、有神論とか無神論とかくだらないことを言っている。そんなことではないですよ。申しあげているとおり、いくらこれは望遠鏡で見たって、顕微鏡で見たって、神さまなんか出て来やしませんよ。神は完全に霊的実在者であって、そんな人間の対象には入ってこない。

「それでは仕方がないから、信じておこう」

と、それは普通の信仰だね。まぁ、悪くはないけれども。

「分からないけれども、まぁ、とにかく神さまがないとどうも具合がわるいから、信じておこう」

と。そんなことをやっていると、あのフォイエルバッハあたりにやられてしまう。

「どうも人間は頼るところがないものだから、仕方がなしに、神というものを想定して、それを拝んでいるのが宗教だ。宗教は阿片である」

と。そんな宗教もあるかも知れないけれども、福音はそんなものではありません。一番現実中の現実であります。一番夢ならざるところの現の世界です。皆さんとこうやって相ま

みえているよりかもっと素晴らしい現の世界が信である。

「私が今在るということは、神さまが在るから在るので、神さまが無ければ、私は無い」

という。はっきりその、

「私が在るということは、神さまの在る実体であり確証である」

というように受けとることが信であります。思い浮かべられたり、思い込んだりしている世界ではない。

●在らしめて在るもの

そのことを一番はっきり言っているのが出エジプト記3章のところです。モーセが神さまにでっくわしたときに、神さまは、

「私はイスラエルの民をエジプトから救い出してやるが、お前は行って、それを連れてこい」

と言った。

「いえ、そんなことは私にはできません」

とモーセが言った。

「いや、私がお前と一緒にいるから心配いらん」

「そうですか、あなたが一緒に行ってくださるなら、では参ります」

と。現実の世界ですよ。神さまが一緒にいてくださるから大丈夫だと。自分の力はもはや受けとってない。自分の力は否です、無力です。神さまの世界は力が無限大です。あの「十誡」という映画を皆さんはご覧なったでしょ。あれは素晴らしい映画だね。モーセが神さまに、

「あなたの名前は何というお名前ですか。みなが聞いたら、何と答えたらいいですか」

と聞いたらば、

「我は有りて在るものなり」

と答えた。我は実在して実在するものである。「我は有りて在るものなり」とは、こんな素晴らしい言葉はありはしない。ところが、この「我は有りて在るものなり」を私はもうひとつ読みたい。

「我は在らしめて在るものなり」

と。私は在らしめて在るものであると。私が在るということは、よろずのものを、森羅万象、人間一切のものを在らしめている在り方だというんです。神さまの在り方はここに時計があったり花が在ったりするのと違うと。

「我は在らしめて在るところのものなり」とは、世界のどんな学者も言ってない。私はお

天道さんを見ていてわかった。お天道さんは遙かかなたに在って、地球を在らしめている。地球の生きとし生けるものを生かしめているではないですか。この太陽の実在というものは素晴らしいではないですか。もし、神さまがなければ、私は太陽を拝みますよね。しかし、太陽は神さまによって在らしめられているから、太陽を拝まないけれども。太陽というものはそんな素晴らしい存在として地球の遙かかなたな所にある。地球上のいかなる素晴らしいものも、地球上のものを在らしめる力を持っていない。人間のいかなる素晴らしい人も本当に人を在らしめる力を私たちは持っていません。私たちを在らしめるものは、この現実を超越したところの現実からくるこの力でなければ。そうでしょ。

人間が人間を救うわけにいかん。いかなる偉大な哲学者も人ひとりの魂を救ったことがあるか。ない。ある程度の満足や喜びは与えるけれども、本当に救うということはあり得ない。本当に救うというものは、私たちは超絶者、次元の違ったものによらなければ救われないんだ。はっきりしているじゃないですか。宗教もへったくれもないですよ。私たちの現実はそういう現実なんだから。我々一人びとりはもう死に直面してどうにもならんじゃないですか。罪に直面してどうにもならんじゃないですか。罪を乗り越えせしめ、死を突破させるところのものは、我々のお互いさまの間からは出てこない。これは上から来なければ。

●逆説の道

「人新(あら)たに生まれずば」

というキリストのごとく。この「在りて在らしめるものなり」というヤーヴェーの神さまがモーセを捕まえて、あのような驚くべき力を現した。もう居ても立ってもいられないでしょ、あなた方はそういう驚くべき実在に自分が顧みられているということになったらば。まぁ、これはなんという人生でしょう。何でもきなさいという魂になるでしょ。

日本の青年はみんななかなか優秀な才能を持っているけれども、ただ一つのものを欠く。あのキリストのところに向かって行った青年が――マルコ伝11章だ――

「善き先生、永遠の生命を得るためには、私はどうしたらいいでしょう。モーセの十誡はよく守ってきました」

と聞いた。

「お前は守ったか。よし。お前は結構な青年だ」

と。キリストは憐んでその青年を見て、

「では、お前は持っているものをみんな売って、そして貧しき者に施せ」

と言うわけだ。青年は富める青年だものだから、これができない。惜しくなってしまった。それで、すごすごと帰ってしまった。これですよ。ただ一つのものを欠く。

「それでは、俺はみんな売ってしまうか」

と、そうじゃないですよ。そういうことではない。青年が「ただ一つのものを欠く」というのは結局、ものを惜しんでいたのではない。自分を惜しんでいた。物を惜しむ心は自分を惜しむ心です。我々は結局、自己を惜しんでいる。これが自我というやつ。

「己を憎まずばわが弟子となることはできない」

とは烈しい言葉です。

「どうも、福音というのはそんな烈しい凄いものなら、もうよそうよそう。もうたまらないから、私はできないから」

と。私だって、もしそうならば、私も逃げて行きますよね。ところが、そのように烈しい言葉は一体何かというと、

「そのところに入ってごらん。今度は、本当の力がくるから。今度は、人を救いにもたらす人になれる。すべてを本当に幸いにもっていく。お前さんのいるところは即ち天国になる。お前さん自身が天国体となって、世の中を幸いにしていく本当の原動力になるよ」

と。そういう驚くべき豊かな救いの世界に、喜びの、光の、大歓喜の世界に入れてやろうという、その道がこの逆説の道なんです。今まで与えられている才能は十全に、十倍、百倍して今度は、神さまの栄光のために喜ばしく働いていく。禁欲主義でも何でもない。一切の欲望は聖化されて動いてくる。我々の一切の能力や一切の欲望が全部、聖化されて、自己本位でなく神本位に動きだす。それが福音です。そんなくすぶったようなものではない。

●十字架即復活聖霊

信というのは、神さまの、その〔私たちの〕信ずるところの主体〔神さま〕の確証である、実体であるという。それでは何がその確証であり、実体であるかという問題にくるわけです。何が一体、その確証であり実体であるか。それはいつも結論は一つ〔キリスト〕。何でしょうか、それは。十字架と聖霊であります。

「われキリストと共に十字架につけられたり」

と。生まれつきの自分を直接肯定したって、これはダメです。それは自己本位の自分を一遍葬ってしまわなければ。「葬ってしまわなければ」と言ったって、自分で葬れませんよ、これは。できませんよ。自分で十字架なんか負えません。キリストは、私のために、皆さんのために、十字架にかかった。「十字架という言」なんです、これが。「十字架という言」ですよ。一番烈しい言葉は、十字架そのものが言葉だという。パウロが「十字架の言」と言うのはその意味です。

「もはや、われ生くるにあらず」

と。ところが、

「キリストわがうちにありて生くるなり」

と。パウロはなぜそう言ったか。「キリストわがうちに」とは何ですか。御霊のキリストです。御霊のキリストでなければ、わがうちに入ることができない。必ず御霊のキリストは入ってくる。十字架でもう自己から解放されたところに、空き巣狙いなんか来ないうちに、キリストはちゃんと入ってくださるわけです。サタンのやつが来ないうちに、ちゃんとキリストは入ってくださる。

「十字架即復活、十字架即聖霊。十字架即復活聖霊」

というような具合に。あの十字架・復活・聖霊はピタッと一つです。それが御霊のバプテスマです。

「御霊のバプテスマ」とは、十字架を真に受けとって、そこに本当に祈りの世界で聖霊に与かることが、これが御霊のバプテスマです。皆さんが祈るときに、これに入らなくてはしょうがない。祈るときに、いくら祈っても、この角度をしなかったら、その祈りはいつまでたっても本当にならない。祈りとはキリストを受けとることなんですから。自分のお願いではない。キリストの本願をわが悲願として受けとることなんです。

「われ汝のうちに在りて一切をなさん」

という。

「この信仰にあれば、すべてのことを為し得る。われ一切の秘訣を得たり」

と、パウロがピリピ書4章で言っているとおりです。

そういうところに入ってきたのを、これを信という。もうガラテヤ書2章20節のあの言葉は本当にその点で代表的な言葉です。

「われキリストと共に十字架せられたり。われ生く、されどわれにあらず。キリストわがうちに在りて生くるなり。今われ生くるは、われを愛して己が生命を棄て給いしキリストの愛によるのである」

と。この言葉と同じことです。

●信は人編に言

そこで、皆さんは、「信」の字をご覧になると、人編に言という。キリストという言が、

「神の言が肉となって受肉して現れてきた」

とヨハネ伝の始めに書いてある。神の言たるキリストが、我という人間の中に入ってきた。これを「信」という。その他に信ではないですよ、「人編に言」とは。信仰の信の字は不思議な構造を持っている。言が我々一人びとりの人間となる。

「キリストという言が我々に化体する」

ことです。

「キリストは私の罪を贖ってくださいました」

という命題をいくら信じたってダメですよ、命題を信じたって。それは神学の信仰箇条に

すぎない。神学的に正しい把握をすることはわるくはないけれども、それではどうにもならん。あなた方は、波と水とを分析することができますか。波は水それ自身だよ。波から水を取ろうなんて。波という字はおもしろいね、「水の皮」だね。水の表面だ。水の表面は波だけれども、しかし、表面の皮をはぐわけにいかない。あれは水ですよ、やはり。私たちの信の世界はそのように、波と水が分かれないように、キリストの御霊と私というものが、皆さん一人びとりが、分かれない事態を、それを信という。信仰ということと、キリストということを分けるわけにいかない。

さっきは話の都合で、福音とは何ぞや、信仰とは何かと分けましたけれども。これは本当は分けられない。福音も信仰もピタリ一つなんだから。紙の表と裏みたいなものだ。表だけ剥ぎましたら、どういうことになるか。表と裏とは相即している。福音と信仰とは、信仰を語れば福音を語り、福音を語れば信仰を語らざるをえないわけですよね。そういうようなのが信の世界です。

●事理不二

坊さんの言葉を少し引っ張ってみましょう。これは天台宗だね。伝教大師、最澄は日本仏教界の最大の器であるといわれるくらい、ちょうどヨーロッパでいうと、アウグスティヌスみたいなやつらしいですね。

「事理不二、煩悩即菩提」

なんていう言葉がある。事と理とは二つにあらず。煩悩は即、菩提である。この穢土即、極楽である。みんなその世界に入ってしまう。福音の真理という「理」というものと、福音の実体というものは、この「事理不二」なんです。そういう把握の仕方をしなければいかん。これが今、この事理がバラバラなんです、いわゆる西洋的な把握の仕方をやると。普通のキリスト教の学者連中がそれを大いに後生大事にやっている。へたすれば、牧師さんもそれを真似してみたり。なぜ、私は牧師さんたちがあんな学者になんかものを言わせて――言わせたっていいけれども――牧師さんたちが本当にこの福音を身に体して、権威をもってその教会を牧しなさらないかと、残念に思う。在り方としていろいろなその教派宗派はあったって――今日本は一つのキリスト教団になっているけれども――ただ一つのキリスト教団になったから、一つの統一して分裂がないなんて思ったら、それはいかん。そんなことを言ったって、それは偽りの平和ですよ。それは結構です。それ自身は私はなにも悪口は言いたくないけれども。

それは○だの、□だの、△だの、☆だのと、何だっていいですよ、大いにそれぞれの在り方で私はいいと思う。また、日本キリスト教団で、結局それぞれの教会がやはりそれぞれの特色をだんだん持ちつつあると思いますけれども。大いに特色を持ってくださって結構です。

問題は、こういうような信仰箇条であるとか、教会の礼拝の仕方であるとか、みんなそれぞれ大いに特殊性を持っていい。そんなことを何も遠慮することはない。ただ問題は、そういった特殊性をもってこれを絶対化しようという角度になってくると、おかしな宗派根性になる。

「こうでなければ福音はつかめない」

なんていう言い方、考え方になってくると、おかしなことになってくる。私も決してそんなことは言いませんよ。私は私なりの特色、特殊性を持っているけれども、

「こうでなければいけません」

なんて絶対に言いません。それぞれ皆さんの顔が違うように、考え方も違うし、表現の仕方も違う。パウロもヨハネもペテロもみんなこれは違う。ペテロなんてのは波みたいなやつです。ヨハネはスーッと深く浸透するようなやつです。パウロというやつは屈折した線みたいだ。それでありながら、私はヨハネを読めばヨハネとなり、パウロを読めばパウロとなり、ペテロを読めばペテロとなり、ヤコブを読めばヤコブとなれる。なんて自由でしょうか。なぜでしょうか。そして、彼らは聖書の中に一体となっている。なぜでしょうか。

こういう△や☆や□や○や、いろいろあって大いに結構だ。決して類型的になりなさんな。私は全体主義は嫌いです。大いにそういう個性主義で結構なんだ。個性主義がいわゆる個人主義になるからおかしなことになる。民主主義も結構だけれども、それぞれの特色は限界があります。相対的な限界というものを持っている。その相対的な限界を持ちながら、知らないまに自分を絶対化しようとして、人に押しつけようとするから、お互いに喧嘩することになる。そのようにならないで、なぜ、

「あなたの☆はきれいですね。あなたの△はいいですね。あなたの□は結構で、あなたの○はよろしい」

と言えないか。言えるためには、ここに共通なものがなくてはいかん。最大公約数だか、分母だか知らんけれども、そういう共通項というものがこの中に来てなくてはいかん。ここにもはや△でも☆でも□でもないところの、ある火が、炎がきている。これです、問題は。この火はこの中に入ると、○を展開する。これはこの中に入ると□を展開する。これは△を展開し、これは☆の形を展開する。そういう不思議なものがこの中にある。

●御霊は一つ

これがパウロがコリント前書12章で言った御霊の事態なんです。

「御霊は一つだが、御霊の賜物は種々雑多だよ」

とパウロが言ったのがそのことです。御霊は一つ。それぞれの教会、集会――カトリックだろうと、プロテスタントであろうと、何々教会であろうと、無教会であろうと、我々のような幕屋なんていうのであろうと――どれでもいいですよ。どれでもいいが、

「そこに御霊が来ているか」が問題なんです。御霊が来ていれば、「御霊は一つ」なんですから、パウロが言っているとおり。

「**神は一つ、キリストは一つ、バプテスマは一つ、御霊は一つ、聖霊は一つ**」というわけだ。そういう意味において、信仰は一つだという。けれども、その賜物は様々であって、あるものは病を癒す力が特別に与えられたり、あるものは真理を深く探究することが与えられたり、あるものを人に教える能力を与えられたり、あるものは芸術に、あるものは事業にと展開していく。教会の在り方も、個人の在り方も同じことだ。それが一つのオルガーニッシュに、有機体的に働く。これはパウロが人間の身体に例えているでしょ。

「**全身がもし目ならばどうするか。目と鼻と口と頭と足といろいろな構造で、それで有機体として一体となって働いているではないか。キリストは頭であって、我々は、全世界の教会は即ちキリストの体（からだ）ではないか**」

とパウロが言っている。パウロの構造は実に健全です。しかし、そこに紛争をきたさないために、大事なものがこの御霊なんです。御霊がなくなったら、もうそれはダメだ。必ずおかしなことになる。御霊があれば自由自在で、しかも大きな調和となる。御霊は人間のものではない。神さまから来ているところの聖霊です。

●聖霊の驚くべき現象

これは上からやってきた。ペンテコステが即ちこれです。聖霊がすべての三千人の者に降った。あのペンテコステを考えても、ペンテコステに三千人の者が直ちに聖霊を受けて、驚くべき現象となった。ペテロたちの語る言葉は、地中海の方々の方言が語られている。これは不思議なことだ。それは事実、異言の高次な世界になるとそうなる。

サンダーシングもある時、話をしようと思ったけれども、通訳が来なくて、自分は英語が知らない。深く祈っていたら、英語が与えられて、どんどんしゃべってしまった。そんなことは超理性の世界であるから、普通の理性では考えられない。

とにかく、聖霊はそのようないろんな働きをなさいます。決して、一つの働きではない。ところが、ある教派の人が「神癒」や「癒し」のことをえらく強調して、癒しの能力がなければ福音はもう把んでいないような顔している。それは間違いです。そんなことはない。癒しは結構です。しかし、癒しは福音の一つの聖霊の賜物である。その自覚のもとに、私たちすべてが、この会員が、日常生活のうちにどのように聖霊の働きがその個人をとおして、その為すことにおいて現れていくかということに福音の大事な面がある。本当の倫理とはそのことなんです。単なる人間の倫理ではないですよ。

そういうようなわけで、ここに聖霊がくればもはや問題はないんです、それが偽りなく本当に十字架の贖いを通ったこの聖霊である限り。

教会の展開の、ある時に聖霊のそのような驚くべき現象が起きたときに、この角度からその現象が起きるかぎり、これは必ず聖霊でありますから、その現象を懼れることはないですよ。それが幻として現れる現象であろうとも、癒しの力として現れるものであろうと、あるいは霊歌というような歌として現れようと、何であろうと懼れることはない。平安なる歓喜をもってこれを受けとって、そして自分の中に深くそれを消化してしまう。そして、どこまでも問題は賜物ではない。賜物に囚われることではなくて、御霊を内住させていくことです。

マッチをすれば、始めパッと火がたつ。それから静かに燃える。炭火を起こすときに、始めはポッポッポッポッと炎がたつ。それから静かに燃える。あのポッポッと炎がたって、恐ろしいなと言って消してしまったらダメですよ。普通はみんなそれをやってしまう。消してしまう。他から、

「あんなおかしな教会があるか」

なんて批判されると、

「そうかなぁ」

なんて疑いだしたりする。「そうかなぁ」なんて疑うのは、本当に十字架が立っていないからです。十字架が本当に立っていたら、疑うことも何もありはしない。何と思われたって大丈夫です。ただし、現象を求めているのではないから、どこもまでもこの御霊の内住の世界を、実存の世界を求める。パウロがいつも書簡の後の方で戒めを言っているでしょ。あのパウロがなぜああいう戒めを言うかというと、足が浮いてしまわないためにパウロは言う。ここにパウロの健全性がある。パウロの書簡の大事なところはそこにある。

一遍、この聖霊のバプテスマを通っていないと、いつまでたっても観念信仰で、あるところまでは行くけれども、ジェット機みたいにこの雲層を貫いて実に静かな世界に入れない。どんなに下に雲があって荒れていても、18,000メートルくらい昇ってしまうと、もう静かなものです。私も今度は通ってきたけれども。そしたら、もう全部まっ青ですよ。そして、まるで翼の先を見ていると、一体ジェット機が動いているのだか動いていないのだか分からない。音はどんどん後ろの方へ行ってしまうから、そうやかましくはない。飛行機の中は電車や汽車よりも――東海道線の特急なんてよさそうだけれども、あれの方がずっと揺れますよ――ジェット機の方がずっと静かで、落ち着いて文字が書ける。それがもの凄いスピードで走っているでしょ。そういう突き抜けの世界です。そうでないと、

「私の信仰は」

とやっていると、しまいにくたびれてしまう。それは放物線を描いて落ちてしまう。ところが、こっちに入ってしまうと、もうずっと宇宙旅行をするみたいなんだ。皆さん、だんだん歳をとるに従って、

「外なる人は日々に破るれども、内なる人は日々に新たなり」

とパウロが言っているじゃないですか。これですよ。「内なる人は日々に新たなり」という。昇り昇って神の国に行ってしまう。

●キリストの本願の劫力

同じ信仰という言葉を使っても、使徒たちの信仰の、信の質がどこで違うかというと、この御霊がしっかり来ている信仰、御霊のバプテスマを一遍貫いた世界です。

「一遍貫いたから私はもういい」

なんて言ったらダメですよ。それは何回も波状的にそういう機会をもって限りなく進んで行きます。「これでいい」なんていう世界はない。いつも満たされながら、常に溢れていくという世界です。満たされながら溢れていく。これは不思議な世界ですよ。私なんてものは実に不完全なやつです。けれども、私の中には完全なものが来ている。だから、私はいつ死んでも、「アーメン、ハレルヤ！」と言える。皆さんがこの御霊を持っていればそうなんです。そこに救いの確かさとこの大安心と歓喜とがある。

「為（せ）んかた尽くれども、希望（のぞみ）を失わず、倒さるれども滅びず。どんなことがあっても行き詰まりを知らない」

とパウロが言った。これが「我が信仰」なんて言っているうちはダメだということです。

「この御霊の恩寵をいかんせん」

という信に入って来ないと。絶信の信、キリストの信、弥陀の本願の劫力というやつです。このキリストの本願の劫力にかかっている。それで行くから――人間はどうせ弱いから躓いたり転んだりいろいろしても――決して後退しないで、そのどんなマイナスの経験も必ずプラスにしていく。そのマイナスの経験をしたときに、失敗をしても何でも、そこに本当にガマガエルのように平伏して祈りなさいよ。私は本当にそうです。必ずその時に光と力が来るから。果たしてくださるから、人にどんなに思われてもかまわん。なお私はその古き我を脱ぎ捨てて進んで行くということができる。己が悪かったら、

「神さま、悪うございました」

と謝る。そして、自分を乗り越えて進んで行く。何もカトリックのように、坊さんのところに行って、何か妙なところに入って、懺悔みたいなことをする必要はない。キリストに直接に申し上げて結構です。人に妙なガタガタすることはいらん。

「神―キリスト―我」

ということ。そして、本当にキリストの光によって、その贖いの力によって、御霊によって、どんどん自分を乗り越えて進んで行く。

これを信という。パウロやヨハネやペテロの行っていた信とは、信仰とは、そういう信受の現実です。信じ受けとっている現実である。キリストを受けとっている。「信ずる」なんて言わなくても。

「幼児（おさなご）の如く我を受くる者ならずば、天国に入れない」

と、「受くる」とキリストがあるところで言っている。私を幼児のように受けなければと。「幼児の如く」というのは、単純に、そんな複雑なことを考える必要がない。どうせ考えたって始まらないんだもの、そんなものは。始まらないものをいつまで考えて何になるか。くすぶってしまうばかりです。

●煩悩即菩提

そういうわけで、なんとまぁ、この福音とは喜びの音信（おとずれ）かと思う。喜びの音信です。キリスト教ではない。我々はこの福音を、喜びの器となって進んでいただく。

さっき、ここに

「煩悩即菩提」

と書いたでしょ。私たちは煩悩の存在かもしれないけれども、即菩提ということは、ここに「即」という、「十字架・復活・聖霊」の即の字がある。ちゃんと菩提の世界にしてくださる。この娑婆の世界を即、天国にして行く。こちらがして行くんですよ。外側の状態はあいかわらず混沌たるものであっても、内側にちゃんと天国を現じて行く。だからこそ、政治の世界でも、あるいは経済の世界でも何でも、地上のおよそ学問でも、実際の事業でも、大いにやっていきなさい。その原動力はそこから来るから。そして、地上ではなかなかそれはうまく行きませんよ、正直。行かなくても、奥にそういう一切の混沌や矛盾をなお支え、なお担っていくところの現実があるかないかで大違いです。そういう人間であるということを見損なっているのがマルクス主義だ。マルクス主義的な社会理念も非常に真理があるでしょうけれども、それで人間は絶対におさまらない。社会主義も結構だけれども、社会主義だけでは、自由主義だけでは、みなそれぞれダメです。みなそれぞれの真理性を持っているけれども、それを本当に統括していくところの最後のものは持たなければ。それはなにも福音を直接に一般の世界に持ち込んで、直ちに「これは福音的にやらなくてはいかん」と、そういうことではない。福音は身に体されて、それから発していくものです。いつも根っこの世界です。見えざる世界です。けれども、根っこがなければ文化という大木は倒れてしまう。

●キリストの書

パウロがコリント後書3章のところに、

「3 **汝らは明らかに我らの職（つとめ）によりて書かれたるキリストの書（ふみ）なり。而も墨にはあらで活ける神の御霊にて録（しる）され、石碑にあらで心の肉碑に録されたるなり。**」（**コリント後3・3**）

とある。私たち自身が即ちこの聖書の続編です。キリストの書です。聖書正典問題なんて

学者が一生懸命でやりますよ。学問だからそれは悪くはない。けれども、大事なことは私たち自身がキリストの書となって、不立文字（ふりゅう）となる。我々自身が文字となる。これは地上にはどんなに書こうとしたって書けない文字です。ただ天界にだけ映っている文字です。私たち自身が即ちキリストの書になっていく。「キリストの書（ふみ）」というのは、もう一遍言い代えると、キリストの証明、証し、証人となること。キリストの書となるということもキリストの証人となるということも同じことです。地の涯までも世の末までもと。証人という言葉はまた別な言葉でいうと、殉教者という言葉と同じです。教えに殉ずる者である。「殉ずる」というのはなにもいわゆる殉教の死を遂げるという意味ではないけれども。即ち、このキリストの道に本当に自分の生涯を、即ち道の証しとして、自分自身が即ち無限軌道のごとき軌道となって行く。そのような具合で、聖書を読むことと聖書の証しをすることとがまた一つになっていく。そうでなければ、聖書を読むことがつまらなくなるですよ。読むということと証しするということが一つになる。だから、皆さん、読むときには、本当にその読むことが直ちに力になる。

「わが言は霊なり、生命なり」

とキリストが言われた。私の言葉は霊であり、生命であるよと。理解する角度ではない。だから、聖書を読んでいて力が来なければうそです。力が来なければ、それは祈り心で読んでいないからです。祈り心で自分をその中に投じて読んでいれば必ず力が来る。読んでいるうちにグーッと力が本当に来ますよ。でありますので、皆さん、もう身体の欠陥があろうと、ご心配はいりません。問題はその実存の奥にそういった力がきていることです。

「福音は言ではない力である」

とパウロが言っているとおり。「力である」と言っても「生命である」と言っても同じことです。この力は不滅の力です。

●パウロの回心

パウロという男はなかなか生まれつき意志の強固な実行力の強い力ある男だったようです。パウロはユダヤ教に対して熱心なパリサイ人中のパリサイ人であると自分でも言っているくらいだ。俺こそは宗教のチャンピオンであると、彼はそう思って、大いにキリストを信ずる者を迫害していた。あの自力（じりき）的な力で彼は大いに自信をもってやっていた。その分裂のない在り方は、それをキリストが見て、

「感心な男だ。けれども、あれはとんでもない方向の間違いをしている。あれをひとつ捕まえてひっくり返さなければいかん」

というわけだ。パウロというのは、とうとうステパノを石で打ってしまった。その証人の張本人だ。使徒行伝7章に出ているとおりです。

ところが、ステパノはあの大演説の後の方で何と言ったか。

「汝らは聖霊に逆らう」

と言っている。あのステパノの一言は霹靂（へきれき）のごとき一言です。素晴らしい言葉です。私はもう撃たれるな、ああいう言葉は。「汝らは聖霊に逆らっている」と。キリストも

「聖霊に逆らう罪だけは赦されない」

と言った。聖霊に逆らう力はサタンの力だからですよ。サタン的な角度からです。サタンは滅ぼされなければならない。「聖霊に逆らう」と言ったら、彼らはみな石打ちにしてステパノを殺した。そのステパノの聖霊の愛はどうですか。

「彼らを赦してやってくれ」

と。キリストと同じく、「彼らを赦してやってくれ」と言って、彼は天界にキリストを仰ぎ見ながら、彼の魂は天に飛翔してしまった。パウロという人を思って、私はステパノを忘れるわけにいかない。天界ではステパノの方が上ですよ。ステパノがパウロの先輩です。このステパノの死はパウロの回心の大事な底力になっている。パウロはステパノの死を始めはいいと思ったかもしれないけれども、終いには彼は本当にあのステパノの死に打たれたに相違ない。しかし、まだ彼は意気揚々としていた。ステパノの死をなお無視しているようなこのパウロを、キリストはとうとうダマスコ途上で彼に現れて、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と。私はあの「なんぞ我を迫害するか」の、あの「我を」の中に「わがステパノを」という気持が含まれている御言ではないかと思う。

「このステパノを迫害し、我を迫害しているお前はとんでもない間違いだ」

と。その声を聞いて、彼は晴天の霹靂だ。意気揚々としてダマスコへ行ったら、真昼の光よりももっと凄い光にパウロは撃たれたと書いてある。使徒行伝9章、22章、26章です。それで、パウロは今まで「わが義」といって、神さまの前に自分が義人のつもりでいたところが、大きな間違いをした。あとで告白している。

「私は自分の義を投げ捨てしまう。もはや、これを塵芥の如く思う。キリストの義を私は、キリストの十字架と復活によって賜った。キリストはわが罪のために十字架にかかり、わが義のために甦り給うた。私に賜ったこの義にあって、私はもはやキリストの御意を行う他にわが存在も使命もない。我はキリストの奴隷である」

と言った。このキリストの奴隷なるパウロは最も自由な人になった。

●愛信一如

旧約聖書ではイザヤ書、新約聖書ではパウロのローマ書、これが一番、信仰を証している二大書であります。彼は、アブラハム、イザヤ、パウロという系列のような信仰の使徒となったわけです。特に信仰の人である。ヨハネは何かというと、今日は愛のお話はしま

せんけれども、特に愛の人となる。これは旧約のホセア、エレミヤという預言者のあとを継ぐようなヨハネであります。ペテロは希望だね。希望の人としてペテロは星のごとく輝いている。信仰と愛と希望とこの三つは限りなくゆく。この三人の人が信仰と希望と愛を、自らの存在をもって表現しているような人だ。これは不思議だ。この三つのものが限りなく残って、そのうち最も大いなるものは愛である。

「16**それ神はその独子（ひとりご）を賜（たも）うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。**」（ヨハネ3・16）

と。「すべて彼を信ずる者」という。一体、私たちは何を信ずるんですか。キリストの十字架・復活・聖霊というものが一体何であるか、その質は。愛であります。そのような十字架の贖罪をなし、そのような復活の生命を与えんとし、聖霊をもって自由に臨んでくださるその聖霊も、復活の生命も、その十字架も、みな愛の実体です。神の愛はキリストに現れ、キリストの愛はそのように現れた。この愛なるキリストを受けとることが信であり、これは愛信一如である。

永遠の生命というのは、ただ永遠に生きるというようなことではない。永遠の生命とは、そのような愛をわかちてやまない生命が永遠の生命です。愛のない生命がどんなに一万年生きようが、二万年生きようが、永遠といわれるように永く存在しようが、それは聖書のいう永遠の生命ではありません。地上の生涯がどんなに短くとも、今日一日であろうとも、一日を即ち永遠として生きる。即ちこの愛を受けているこの信です。信とはそのように愛を受けとることである。そのことはキリストはまた別なところで、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主なる汝の神を愛せよ」

と言われた。神を愛するということと、信ずるということとはまた一つです。みな一つです。そのように愛するとはいかにして可能であるか。神の愛がキリストを通してやってきているから、この愛が溢れて神さまに向かって信となり祈りとなる。人に向かっては、本当に愛の実存となる。上と下に向かう。神さまに向かう原動力は上からきている。反射する。それから横に流れていく。自由自在。それが即ち私たちが信の実体とされるわけです。

●懼るな、我なり

私は信仰の話をして、もう一つの話をそこに付け加えようと思う。それはペテロの話です。キリストが大荒れに荒れている湖上を渉（わた）って来た。キリストは夜もすがら祈っていた。明け方になって、海の上を渉ってきた。あれは本当ですよ。今の牧師さんたちは信ずるかどうか知らんけれども、私はそのまま信ずる。ガリラヤ湖を渡って来て、湖の上で翻弄されているペテロたちの乗っている舟のところへやって来た。

「あっ、あれは化け物かな」

と思って恐れた。けれども、キリストは、「我なり、懼るな」と。あの言葉は大事な言葉です。

「懼るな。我なり。汝ら、心安かれ」

と。「懼るな、私だよ」と、その声を聞いてペテロは、

「先生でしたか。それでは私もそこへ行かしてください」

「ああ、来なさい。来たれ」

と。そしたら、ペテロは喜んで、波の上を始め渡れた。素晴らしい。これはペテロが素晴らしいのではない。ペテロがそういった全的な信をもってそこに行じたわけだ。信行一如の世界を、アブラハムみたいにやったわけだ。それはキリストの吸引力が、キリストの信がかかっているからです。キリストの信が、「よしっ」と言う。ところが今度は、キリストを百％に見ていればいいのに、風が吹いてきたら、風を見て恐れた。恐れて沈むかなと疑ったわけだ。恐れ疑いが生じてきて、本当に沈んでしまった。「助けてくれ」と、ペテロは。

「我を救い給え、憫み給え、助け給え」

と言う。そこでペテロをつかまえて舟に戻して波を静めた。そういうキリストであります。キリストの現実というのは、もうとうてい私たちがちょっと想像のつかない凄い現実です。そういうような驚くべき信とは、そのように分裂なき全托のかたちです。このキリストの力に、このキリストの愛に、このキリストの救いに、このキリストの霊に全托するのがこの信で、その中に一つとなる。この「中に」という世界だけが、

「エン・クリスト」

というのが、パウロがさんざん言っているところの信の世界です。「パウロの神秘主義」とか何とか言うが、神秘主義でも何でもない。本当にその「中に」の世界です。現実なんです。なぜ、そのことをもっと今のクリスチャンはつかまないか。すぐ神学、すぐ聖書解釈、そんなことばっかりしている。そんなものはいらんですよ。それをしっかりつかんでから、本当に神学するなら神学してください。本当の神学が出てくるから。

「信愛一如」の世界で、

「独子を賜うほどに世を愛し給えり。すべてこの愛なる彼を受けとる者は」

という。私たちが一番飢えているものは愛ですよ。人間が一番飢えているものはこの愛なんだよね。神における、キリストにおけるこの愛が最大の愛ですから、この大愛を受けそこなっていずこに行かんとするか。何を受けんとするか。私たちはこのキリストの愛にぶつかったら、もうただ驚嘆驚倒、ただそこへ自分の身を投げかける他にありはしない。それを信という。投げかけることを信という。必ず滅びない永遠の生命が、愛の永遠の生命が来るではありませんか。終わります。